

重症先天性トキソプラズマ症の1例

瀬戸上貴資^{1),2)}, 太田 栄治^{1),2)}, 合志 光史³⁾,
廣瀬 伸一^{1),2)}

¹⁾福岡大学病院 総合周産期母子医療センター新生児部門

²⁾福岡大学医学部小児科

³⁾中津市民病院小児科

要旨：症例は日齢7の男児。妊娠33週より脳室拡大を指摘されており、在胎38週5日に経膈分娩で出生した。出生体重3372g。日齢7に精査目的で当院を紹介受診した。母親の生活歴に加え、児の血液検査で抗トキソプラズマIgM抗体陽性であり、頭部CT検査で頭蓋内石灰化と水頭症の所見がみられたことから先天性トキソプラズマ症と診断した。日齢16よりピリメタミン/スルファドキシンの内服を開始し、水頭症の増悪に対して日齢27に脳室・腹腔シャント（VPシャント）術を施行した。日齢42に退院後、内服加療は計1年間で終了した。1歳時の眼科診察で網脈絡膜萎縮の所見がみられたが、3歳現在、視力障害はなく発達・発育も順調である。

キーワード：*Toxoplasma gondii*, TORCH症候群, 不顕性感染, スクリーニング, ファンシダール®